INTERVIEW：インタビュー

プロ雀士 小林 剛さん

プロ雀士の小林剛さんは，競技麻雀において，非科学的な考え方を用いないという立場を取られ，複数のタイトルを獲得するなどして活躍されています。今回は，プロ雀士を目指されたきっかけから，競技麻雀の魅力，臨み方，技術的なことまで，幅広く伺いました。偶然に惑わされず冷静に物事を判断する小林さんの姿勢は，競技麻雀に限らず，人生の数々の場面においても通じるものだと感じました。

（聞き手・構成：木村容子，味岡康子，鈴木啓太）

1　麻雀との出会い ～麻雀連合（当時）に入るまで

── 小林さんと麻雀との出会いについて教えてください。

麻雀との出会いは，高校1年生の頃に友達から教えてもらったのが最初です。

── その際，麻雀をどのようなゲームだと捉えられましたか。

牌の組み合わせと確率について，正解は分からない中で，多分こっちが得だろうというのを導き出して選択し続けていくゲームだという認識はすぐに持ちました。現在もその認識は変わっていないですね。

── 麻雀のどのような点に魅力を感じますか。

やはり組み合わせと確率のゲームという要素に一番魅力を感じます。また，組み合わせと確率を予想しながら，ただ計算するだけではなくて，決断していく力も必要になります。怖くても行かなきゃいけないし，我慢しなきゃいけない。そういった勝負をしているところも面白い要素の一つだと思います。

── ほかにもお好きな競技，勝負事はありますか。

僕はスポーツもよく見ますが，数字に着目して麻雀に当てはめて見ていますね。例えば，野球の打率は，麻雀のあがり率*1やトップ率*2によく似ていると思います。野球でヒットを打つ確率と本当に麻雀でトップを取る確率は同じぐらいで，2割5分ぐらいですが，1打席失敗したからといってそんなに野球選手は落ち込まないと思います。いい偶然が起こりやすいように最善の努力を続けるんですね。その結果2割5分ではなく2割8分残せればいいなという感覚は，非常に麻雀に似ていると思います。

── 競技麻雀を始めたきっかけについて教えてください。

高校を出て，東京理科大学入学と同時期に雀荘に行き，雀荘での仕事も始めたんですけれども，勤務先の雀荘のオーナーと店長がプロ雀士の方で，その人たちが出られていた競技麻雀に参加させてもらうようになりました。

── プロ雀士になろうと思われたのはなぜですか。

純粋に麻雀が強くなりたいと思っていたので，プロ雀士になり，プロ団体で実施されるタイトル戦のナンバーワンを目指すことにしました。当時の日本麻雀最高位戦というプロ団体に参加するためには，1年間奨励会で勉強する期間が必要でしたので，大学2年生，19歳のときに奨励会に参加しました。その奨励会で良い成績を残すことができ，日本麻雀最高位戦（当時）というプロ団体に入ることができました。

── その後，麻雀連合（現在の麻将連合）に移籍されたきっかけは何ですか。

僕がプロ雀士になった頃のプロ団体の活動は，基本的には，麻雀の強い人たちが会費を払ってリーグ戦をやって勝ち負けを決めているだけ，という状況だったと思います。そうした状況を変えて，ファンに支持される麻雀団体を作ろうということで，井出洋介プロが麻雀連合（当時）を立ち上げました。当時，僕はプロ雀士になって1年目だったので，現実的な組織運営などについてはよく分かっていなかったというのが正直なところでした。ただ，麻雀が強いだけではなく，点数計算の歴史的変遷や仕組みの成り立ちを説明できるなど，ファンの方に麻雀について聞かれたらきちんと答えられるようでなければ本当のプロとは言えないのではないか，という考えに共感したので，ファンから支持される本物の職業としてのプロ雀士を目指し，プロ団体を移籍しました。

2　プロ雀士として

(1)　プロ雀士に必要なこと

── ファンから支持されるためには，具体的にどのようなことが必要になるのでしょうか。

ただ自分が打つだけではなくて，ファンに対して，プロ雀士がどのように考えて，どういうことをしているかなどを分かりやすく伝えることが必要だと思います。また，打ち方を見せることに関しても，放送対局において視聴者の見やすさに配慮するよう意識しています。あとは，どこで見られても恥ずかしくないよう生活するようになっていると思います。

── 放送対局の解説のお話が出ましたが，解説をされる際に，具体的に意識されていることはありますか。

やはり分かりやすく伝えるのが第一で，麻雀をあまり知らない方にも分かるように，難しい言葉や略語をなるべく使わないようにしています。全員に伝わる話というのはすごく難しいので，どうしても高度な話になるときはしかたがないのですが，できるだけ難解にならないように意識しています。

── 例えば，避けている略語として何が挙げられますか。

最近で言うと，トイツ落とし*3のことをトイオトと略す方がいますが，僕は略していません。また，一向聴（イーシャンテン）のことを向聴（シャンテン）と言う方も増えています。向聴というのは，あと何手で聴牌（テンパイ）*4するかという意味で，一向聴，二向聴（リャンシャンテン），三向聴（サンシャンテン）と徐々に向聴数が減っていき，あと1枚で聴牌することを一向聴といいますが，なぜかその一向聴のときだけ「一」を省略するという不思議なことがあるんです。「向聴戻し」などの本来の正しい言葉が使えなくなって，むしろ困っているんです。

── 略語の使用の有無を判断する基準のようなものはありますか。

例えば，携帯電話のことを「携帯」と略すことがありますよね。「携帯」だけだと何を携帯するか分からないので不思議には思いますが，「携帯」のように一般的になれば大事な「電話」の方を略していいとも思います。一向聴も大事な「一」を略すというのが不思議ではありますが，その意味での「向聴」が一般的になれば僕も使うかもしれません。今は分かりづらい人もいると思うので，できるだけ使わないようにしています。

── ほかに解説中に意識されていることはありますか。

僕は，他人の打ち手をあまりけなさないことを心掛

けていて，この人はこの局面をこうとらえてこう切った*5のでしょう，ということを，できるだけ本人の意思を汲み取って否定的ではなく伝えるようにしています。普段から打牌候補のメリット，デメリットを比較検討しているため，自分では切らない牌を他人が切った場合でも，その選択に至った理由は分かります。自分の考えと違った場合でも，単純に否定するのではなく，その理由の違いを説明するようにしています。

── プロ雀士として様々な活動をされる中で，一番つらかったことと一番嬉しかったことを教えてください。

つらかったことは，負けて落ち込むようなことはあまりないのですが，僕が21歳のときに初めて決勝戦にたまたま残ってしまって，優勝目前から甘い牌を切って優勝を逃してしまったことがありました。今までどんなぬるい場で麻雀を打ってきたんだというのがばれてしまったような1打をやってしまったと思い，さすがに今までの麻雀環境なり心構えなりを1カ月ぐらい反省して，それ以来，麻雀への向き合い方が変わった気がしますね。嬉しかったこととしては，もう12年ぐらい前ですけれども，将王という自団体のリーグ戦のトップを3回取っているんですが，その1回目の受賞は今でも印象に残っています。

── 麻雀のアマチュアとプロ雀士の違いはどこにあると思われますか。

技量的なところだけを言えば，アマチュアの方でもレベルの高い方がたくさんいらっしゃると思います。その中で，アマチュアとプロ雀士の最大の違いは，仕事としてやっているという意識や専門家意識を持っているかどうかだと思います。例えば，麻雀番組に出演したときに，麻雀を4戦して出演料を頂くケースがあるとしたら，1打見せるごとに何円分の仕事，ということになりますから，1つの打牌も疎かにできないですよね。だからこそ，手牌は視聴者に見やすくきれいに並べなければならないし，それを解説する側のときは，本当に観ている側に楽しんでもらわなきゃいけないので一生懸命話します。また，職業として，専門家としてやっているので，技量的なところだけではなく，細かくて役に立たないかもしれないような麻雀に関する知見を持っていないといけないと思っています。

(2) 技術的なこと

── 麻雀の技術的な部分をお伺いしますが，小林さんは主にどういう方針で麻雀における行動を決定されていますか。

基本的には，「あがらせずにあがる」ということだけを考えています。人によっては役の高い低いを重視して打つ方針をとる方もいらっしゃるのですが，実際には，平均打点は成績に大きくは影響せず，あがり率と放銃率*6が成績に直結することが分かっています。あがり率が高いということは，相手が得点をするチャンスをつぶしているということなので，成績に直結するんです。だから，自分のあがり率を上げて，放銃率を下げる。これ以外はあまり気にしていないですね。

── 小林さんは，「ツキ」や「流れ」などの麻雀における考え方について，明確に反対の立場をとっていることで知られています。

そうですね。このランダムに混ざっているものが，どうして「流れ」とか「ツキ」といったものに支配されると思うのかがむしろ不思議です。もちろん，いい偶然が起こったことを「ついていた」と言って，悪い偶然が起こったことを「ついていなかった」と言うのは自由ですが，あくまで過去の偶然を評価している言葉なので，将来の行動を決める指針にはならないのではないかと思っています。ただ，20年ぐらい前までは，麻雀は「ツキ」のやりとりだ，という方が本当に多かったですね。例えば「この宝くじ売り場はよく1等が出る」というとそこが大混雑するのと同じ現象というか，過去にいい偶然が起こった場合，別にその通りにならないと思っていながらも，すがっちゃう方が多いんですね。

麻雀は，組み合わせと確率のゲーム。その要素に一番魅力を感じます。ただ計算するだけでなく，決断していく力も必要になります。怖くても行かなきゃいけないし，我慢しなきゃいけない。勝負をしているところも面白い要素の一つだと思います。

小林　剛

── 支持者が少なかった約20年前は，反発がありましたか。

いっぱいありましたね。「ツキ」は関係ない，というような広報活動をすると，「麻雀はそんなに薄っぺらいものじゃないんだよ」とか「若いうちはそうだろうけどね，君もそのうち分かるよ」みたいなことを長年言われてきました。また，僕が局面に対応して確率は低いが点数が高くなるという打牌をした際に「お前は確率の人だからあっちを切らなきゃだめだろう」といった誤解をもとに批判されたこともありました。ここ20年ぐらいは，僕を含めて僕ぐらいの世代の人が「ツキ」とか関係ないんだよというのを声高に言うようになって，賛同してくれる同世代以下の人は増えてきていると感じています。

── 麻雀の上達にあたって，心掛けるべきこと，意識すべきことがあれば教えてください。

普段から本当に休まずに何がきたら何をしようと考えておいた方がいいですね。最初の段階から，何がきたらどう対応するかなど，できるだけ色々なことを考えてほしいと思います。「この手は三色（サンショク）*7にするぞ，欲しいのは三萬（マン）と三筒（ピン）です」じゃなくて，「三色になるかもしれないし，一気通貫（イッキツウカン）*8になるかもしれない」という，色々な可能性を考えながらやってほしいですね。麻雀は，最初は色々な可能性があり，徐々に現実的なところに絞っていくものなので，最初から形を決めないで打った方がいいですね。あとは，麻雀は4人でやるものなので，いつでも自分の思い通りにはならなくて，基本的には悪い偶然，不愉快なことが起こり続けるゲームだという認識を持った方がいいと思います。負けても気にしない。鈍感力を身に付けることがコツかなと思っています。

── 悪い偶然によって振り込んでしまったのか，明らかにおかしい間違いで振り込んでしまったのかという違いはありますか。

それを判断できればいいですね。振り込んでも振り込まなくても，結果にかかわらず，常に，「これ切ってよかったかな」，「こっちを切るべきかな」ということは，しっかり考えながらやった方がいいですね。

── 麻雀は自分でコントロールできないところがあるということですが，そのような割り切りが難しくて不安になってしまう人にアドバイスを頂けますでしょうか。

麻雀は，都合のいい偶然も都合の悪い偶然も起こるので，それを悲観的にも前向きにも捉えられるんですよね。例えば，ドラ*9を捨てました。次もドラでした。それも捨てますよね。これを「うわ，失敗した」と思うか，「相手にドラが行かなくてよかった」と思

うかということだと思います。そうやって麻雀における偶然をどのようにも捉えることができるのですが，悲観的に捉えちゃう人が多いんですね。こうしておけばよかったと言いたがる人は多いですが，僕は，基本は単なる偶然で，その偶然の結果を前向きに評価したり，後ろ向きに評価したりしてもしょうがないと思っています。本当に，基本的に悪い偶然が起こり続けるものだと思っておいた方がいいですね。麻雀だけに限らず，普段の生活においても，いい偶然，悪い偶然は常に起こり続けるので，その偶然をいちいち気にしてもしょうがなくて，やることは一緒です，と思っておくことが重要ですね。

── ほかに対局の際に心掛けていることはありますか。

僕は普段からきれいに理牌（リーパイ）*10するようにしています。理牌は，ある程度上級者になると，しなくても打つことができるのですが，自分のためだけにすることではなくて，あがったときに相手にあがり形と点数を分かりやすく提示して，納得してもらうためにするものなんですね。例えば，特に萬子（マンズ）の二，三，四あたりは，上下までずれていると本当に分かりづらい。この場合（**右上写真参照**），他のメンツ*11がすべて揃っていれば，二が雀頭（ジャントウ）*12で「二，五」待ちになりますが，

上下が揃っておらず分かりにくい例

上下がぐちゃぐちゃなので，見慣れてない人はすぐに認識できないんです。

── 決勝戦などで現実的な手段では1位となることができなくなった，いわゆる目無しのケースで，小林さんは基本的な対応方針を決められていますか。

2位以下に評価の差がある場合，1位の価値が一番大きいのは間違いないので，ある程度無理して1位を狙いますが，基本的に堂々と一着順でもアップするように打った方がいいと思います。2位以下が一緒の場合，基本的には親番*13があるうちは最大限得点することを目指せばいいと思っていますが，優勝を目指して無茶するのも諦めるのも，決勝戦に出ている人の権利だと思っているので，現実的でなかったら諦めるかもしれません。場合によっては，予め「私は人数合わせです。リーグ戦1回戦のように打ちます」と宣言するこ

麻雀用語の簡単な説明

＊1　**あがり率**…総局数に対するあがった回数の割合。
＊2　**トップ率**…総半荘数に対するトップ（1位）を獲得した回数の割合。
＊3　**トイツ落とし**…手にあるトイツ（同じ2枚の牌）を場に捨てていくこと。
＊4　**聴牌**…あと1枚であがることができる状態。
＊5　**切る**…手にある牌を場に捨てること。
＊6　**放銃率**…総局数に対する他の人に振り込んだ回数の割合。
＊7　**三色**…一般的には，三色同順というあがり役の略称。
＊8　**一気通貫**…あがり役のひとつ。
＊9　**ドラ**…持っていると高い点数を得られる重要な牌のこと。
＊10　**理牌**…一般的には，自分の手牌を順序良く整理して並べること。
＊11　**メンツ**…3枚又は4枚からなる牌の組み合わせのこと。
＊12　**雀頭**…アタマとなる同じ2枚の牌の組み合わせのこと。なお，基本的に，あがるための原則形態は，1雀頭4メンツの形に1つ以上のあがり役があることである。
＊13　**親番**…東家（親）となる番。基本的には，あがったときの点は高く，他人に自摸（ツモ）であがられたときに払う点も高くなる番である。
＊14　**半荘**…麻雀におけるゲームの単位で，東場（4局）と南場（4局）をあわせたもののこと。

とがあります。そうしないと相手が非常にやりづらくなってしまいますし，むしろそう宣言した方が視聴者も分かりやすく，番組としても良いと思っています。

3　数学への興味など

── 小林さんは中学生時代にRPGのダメージ計算式を予想して試行された結果，だいたい同じであったとのことですが，計算式を予想するなどの数学の魅力は，麻雀に通じるものですか。

昔から僕は数学が得意で，その中でもただ計算することよりも，いかに工夫して計算するかを長年頑張ってきたつもりです。食塩水の問題をいかに簡単に解くかといった，学校で教わらない数式を自分で作っていたこともあるので，そこは麻雀に通じるかもしれません。与えられた題材から計算するとこれが正解であるはずといったものが，おそらくこのゲームのダメージ計算や麻雀の正解を導く思考に共通するような気がします。

4　最後に

── 今後のご活動の目標があれば教えてください。

今後もプロ雀士としてやっていきたいと思っているので，さらにプロ雀士業界が大きくなって，麻雀に対する昔ながらの社会的なイメージも変わっていくと良いと思っています。

── プロ雀士業界の在り方も変化してきているのでしょうか。

プロ雀士業界の在り方も変化してきているように思います。現在，プロ雀士業界として，大きな団体が5つと，小さな団体が複数ありますが，実は僕ぐらいの世代は結構仲が良く，お互いに協力して頑張りましょうという雰囲気になってはきているので，今後はもっと一致団結できた方がいいと思っています。プロ雀士としてこうするべきというのは，共通認識としてみんな持っていて，ネット番組で団体の垣根なく取り上げていただいているので，本当にこの機会を活かしていきたいと思っています。また，今，プロ雀士業界をどんどん発信していかなきゃいけないので，こんなプロ雀士がいる，というプラスに働く企画であれば協力していきたいと思っています。

── 将棋や囲碁のプロと並べて論じられることが多い印象を受けますが，いかがですか。

そうですね。そうなってくれたらありがたいなと思っていますね，囲碁や将棋のプロの方は，頭脳ゲームの頂点というイメージがありますよね。麻雀もそうなってくれると嬉しいとは思っています。最近は，ネット番組などのおかげで少しずつ麻雀に対する社会的な認識が良くなってきている気もします。また，半荘（ハンチャン）*14の合間の『大喜利』コーナーみたいなものに参加選手が呼ばれるという，麻雀だからこそできる企画もあります。こういった緩い部分も残していければ良いとも思います。

── 楽しみですね。最後に，弁護士に対するイメージをお聞かせください。

弁護士の方が，麻雀をやっていますと堂々と言ってくれるだけで，麻雀のイメージ向上につながると思っていますので，それだけでも業界全体としてはありがたいと思っています。

── 当会に将棋と囲碁の同好会はありますが，麻雀はないので同好会も立ち上げたいですね。

ぜひ。

プロフィール　こばやし・ごう

1976年2月生まれ。東京都八王子市出身。東京理科大学入学後，プロ雀士を目指し，日本麻雀最高位戦（当時）に入会する。その後，麻雀連合（当時）に移籍する。現在，麻将連合の認定プロ。2003年，第3回野口恭一郎賞を受賞。2004年から2013年の間連続して麻将連合の将王決定戦に出場し，第3・7・9期将王を獲得。そのほかの主な獲得タイトルとして，第1・2期天鳳名人位などが挙げられる。